飯富地区　地域と水害の歴史

柏純一さん（七十代）

飯富集落の形成

飯富集落の多くは、台地斜面下に沿ってつくられ、そこに旧国道一二三号が通っている。

理由は、

・生活用水が湧くところ。
・農耕民族で、那珂川沿いの肥沃な農耕地に行くにも坂を上らないで済む。
・那珂川の洪水に遭わない頃合いの高さのところがある。

などが言えるだろう。

もっと古くは那珂川の水運時代、別な場所のところに形成された話を聞いたことがある。

水害と坂道

水害時の避難は、高台に通じる五本の坂道が近くにある。このため避難は、洪水の出具合を見て個人個人の判断で行動している。畑の作物は、洪水が予想されるときはあらかじめ収穫するなどしている。

今回の洪水の出具合を旧国道一二三号で見てみると、県道水戸茂木線との交差点や小学校前へ通じる市道の交差点、釜井戸地区で交差する市道の三本の広い坂道の筒所では約一メートル水没した。道幅は広くても水が引くまで利用できない状況だった。

使用できた坂道は、この寺坂辺りから、郵便局の先下り坂となっている間にある二か所だった。でも、一本は木が倒れていたため使用できなかった。

唯一高台と行き来できたのは、一番道幅が狭いこの寺坂の道だけであった。

この寺坂の道は、高台の遠方からこの坂を通り那珂川まで通じていた。

ところどころの辻に、石作りの道標があるように古道である。

水害に遭わなかったこの位置に坂道を作ったことは、先人の知恵を感じる。

坂の名前を寺坂と呼んでいるが、坂の途中に廃寺跡があるので、そのためつけられたのだろう。

避難するにあたり、幅が狭く車の交換ができず大きな障害となった。日常においても不便をきたしており、現在、市に対し広げる要望をしている。

令和元年飯富地区の洪水

近年は堤防による治水で、堤防の越水や決壊によって洪水の被災状況が変わってきている。決壊したところは、特に大きな災害となっている。堤防による治水前は、流域全体で低いところはゆっくりと水を被っていた。洪水より農地が削り取られないよう水の勢いを和らげる木組みを川の中に造ったり護岸をしたり、また、水辺に強い木を植えたりなど、浸食を防ぐ治水対策だった。洪水により肥沃な土地ももたらした。でも、私が知る限り、今回のような極端な洪水はなかったと記憶している。

今回の洪水は、藤井川、田野川が合流する箇所で、那珂川本流の堤防が屈曲しておりそこの箇所での越水が起きた。国土交通省のまとめによると、上流で記録的な雨があったとのこと。このため昭和六十一年の洪水後、飯富地区を囲む藤井川、那珂川、田野川の堤防を約二メートル嵩上げされていたがそれでも越水が起きた。越水は時間が経てばある程度の洪水で収まり仕方ないと諦められるところもある。しかし今回の洪水で致命的だったのは、田野川が決壊したことである。昭和六十一年の洪水後の堤防計画に合わせ、堤防そのものは完成していたが、常磐道の側道で田野川に架かる下仁田橋と少し上流にある東橋の二本が、堤防計画の高さでできていなかった。水戸市は一本にまとめ架け替えることを計画して、地元説明まで進んでいたが中止の状態で今回の洪水まで途絶えていたとのこと。このことは、洪水後、用地買収に関係する地権者から聞いた話である。この地権者は高台の田野地区の方のため洪水のことは直接な関心は薄く、その後どうなっているのか？と思っていたとのこと。被害を被った飯富町内の地権者はおらず、その状況は知る由もなかった。一方で、国土交通省、茨城県の説明では堤防の決壊とはしておらず、浸食であるとのこと。このことは、二つの橋が低いままの状態であったため、ここから洪水が溢水し、高速道路下の堤防が、川の裏側の法面を侵食し堤防全体が決壊した。要は、決壊と同じ状態ではあるが、原因は水戸市が大仁田橋を架け替えなかったことでそこからの溢水によるもの、と国上交通省のまとめでは読み取れる。藤井川も同じように決壊しており、そちらの方は堤防を越水しての決壊のため、決壊として扱っている。今回の洪水を受けて、水戸市は架け替え工事を今になって行っているが、なぜ、当時架け替えを中断したのか、

また、夜の洪水で土のう等による水防を行ったのか、あまりにも損失が大きく悔やまれる。

湧き水の利用

寺坂沿いには豊富な湧き水があり、そこから出た沢水を下流で汲んで、各々家庭が生活用水として利用していた。

子どものころ、何度も汲みに行った辛かった思いが記憶にある。

今、ここに石碑や飲料水用の枡があるが、これはつい最近作られたものである。

こちらに古いコンクリート造りの四角いものがあるが、子どものころ、下の集落に生活用水として造られた簡易水道の貯水槽である。

水が湧いていた場所に造られた。

水槽の上からチッタチッタ塩素を落とし消毒をした。

ここから管を引いてめいめいの家庭へ行き渡らせた。

水戸市の水道が来る前の話だ。

画期的なことだった。

昭和五十年代、水質検査に関わる友人がいたので、この湧水の検査をお願いしたところ、

「少々のチッソ成分が出ているが、子どものころから毎日飲んでいれば別として、健康には影響のない水」と言われた。チッソ成分が出たのは、近年の高台の近代農業による肥料の影響かも知れない。

柔らかくておいしく、若水として毎年のように汲んで神棚に奉げていた。

東日本大震災の時一時の断水があったが、この沢水をいち早く準備し生活用水に利用した。

また、私たちの集落は、高台のすぐ下にあるため、地下水が湧き出ているところが多く、多くの家で井戸を持っていた。直径九十センチメートルのコンクリートの枠をいくつか積み重ねた井戸である。

でも、水質は鉄分が含まれ、時間がたつと赤茶けてきて、渋水と言って飲料水には向いていなかった。

しかし、その昔は、砂や炭などを入れた袋で濾して生活用水に利用していたらしい。

湧水源周辺について

この水飲みの枡や石碑、水の命名、廃寺跡に建てである何も書いてない石碑は、つい最近になって大井神社の親族の方が設置したものである。隣にある、大井神社の墓所を作るのに合わせ造られた。庚申塔の石碑もつい最近、寺坂下にあったものを特定の人が持ってきたものである。

そちら平らになっている住居跡は龍光院という廃寺跡で、いくつかの石碑が立っているが、一つは水戸市教育委員会で建てたものである。廃寺のいわれなど書いてあるが、真意は定かでないと私は思っている。

また、芭蕉の模擬俳句碑も立っているが、古いのは、当時の住職が趣味で立てたものだと推測する。

近年、趣味の方が立てた石碑もある。

こちら坂の上、小高いところには愛宕神社がある。

大井神社下の集落、大井下組で祀っている神社である。

毎年七月に管理作業を行っている。

その昔は、田植え後のお祭りとして、祝い物など撒くなどにぎやかだったそうだ。

廃寺跡は私の祖父が、弟に分家した廃屋跡である。愛宕神社も私の祖父が大正時代に組内の共有地として分けた土地である。

湧水個所から沢沿いには、つい最近まで道があったが、墓所の法面が崩れるなど今は沢となり無くなってしまっている。

また、沢の下流の方は侵食され、寺坂のコンクリート舗装の間から水が噴き出るなど、舗装の陥没などの災害が懸念される。

茨城鉄道について

今立っている道路は昔鉄道が走っていた。あそこが飯富駅になる。

茨城交通茨城線、通称茨鉄と言って、上水戸駅から御前山駅まで走っていた。

旧国道一二三号にバス交通が走る前で、母の実家が以前の常北町だったので、石塚駅まで多く利用した。

客車はディーゼル機関車が走るようになり、それまでの蒸気機関車は、貨物を引いていた。

学校のすぐ下に線路があった。

坂になっていて、蒸気機関車は貨物を引くのがやっとで速度が遅く、下校時、飛び乗ったりしたものだ。

また、燃えている石炭が落ちて山火事がおき、消すのを手伝ったりした。

叱られたり、褒められたりしたものだった。

飯富駅は、特産の牛蒡やサツマイモの集荷場となっていた。サツマイモは甘くておいし

く失敬し生のまま食したものだ。
　貨物用の引き込み線や倉庫もあり、また、広い駅前広場があって、多くの人が集った大きな駅だった。
　今は、住宅に分譲されている。
　水戸の市街地や海水浴に大洗方面へ行くのにもこの鉄道を利用した。
　反対方向を向くと、すぐそこが県道水戸茂木線と交差している。県道水戸茂木線も元鉄道のあったところを利用している。
　上水戸駅からは大洗まで行っている水浜電車となり架線の路面電車に乗り換える。住宅の屋根すれすれの幅の中を通り、そして広い国道五十号に出る。その真ん中を走って水戸駅へ。
　水浜電車は特に、水戸駅から大洗までが楽しかった。今、国道五十一号となっているが、水戸一高のところで常磐線を跨ぐ喜び、涸沼川の鉄橋を渡るときは窓の外は何もなくすぐ下が川で子供心にスリルを感じたものだ。
　海水浴はもっぱら磯浜海水浴場で、今その場所は大洗町役場となっている。

（インタビューでの語りを元にご本人が加筆）

湧き水の貯水槽

組内で管理する愛宕神社